

中国都市部における“80後”の婚姻状況と価値観の変化

Marriage Problem and Change in Value of Post-80s in China's Urban Area

鄭 鳴 鳴

Ouming ZHENG

はじめに

1. DINKs (ディンクス) とその背景
2. “剩男・剩女” と見合い番組の流行
 - 1) “剩男・剩女” と見合い番組
 - 2) 見合い番組をめぐる問題点
3. 独身者とセックスフレンド
 - 1) 2011年の“80後”セフレ調査結果
 - 2) 2017年の“80後”セフレ調査結果
4. レンタルフレンドと代理見合い
 - 1) レンタルフレンド
 - 2) 若者による「見合い大会」
 - 3) 代理見合い
 - ①「代理見合いコーナー」
 - ②若者と親世代の論争
5. 金銭目当ての婚姻と“裸婚”
 - 1) 「拝金主義婚」
 - 2) “裸婚”

おわりに

参考文献

はじめに

2017年2月28日に公表された「2016年中国国民経済及び社会発展についての統計報告」によると、“80後”の人口は約2億2,800万人とされている。現在、“80後”の年齢はおよそ28歳～37歳になっており、なかには社会で活躍し、重要なポストについている者も多い。1979年以降、中国都市部のほとんどの家庭では「一人っ子」しか産まなかった。このような特殊な歴史的な背景の下、現在の“80後”がさまざまな心理的及び社会的な問題を抱えているのは想像に難くない。

筆者は2011年から中国の“80後”の婚姻問題について調査を始め、それと関連する中国の人口政策にも注目してきた。また、人口構造の変化と中国の人口政策の変化により、彼らが直面した婚姻問題と社会問題にも注目した。例えば、都市部における30代後半になってもまだ結婚していない者もいる。中国には古くから“男大当婚、女大当嫁”（大人になれば男は娶り、女は嫁ぐべき）という言葉がある。しかし現状で

は、いわゆる結婚適齢期に達している若者たちがさまざまな理由で結婚難に直面している。これは大きな社会問題として、潜在的な不安定要素になっていると言わざるを得ない。

社会と経済の発展により、人びとの価値観が大きく変化し、逆に人びとの価値観の変化はまた社会発展の方向に大きな影響を与えた。“80後”は、婚姻の自由を目指し、相手（とくに男性）の経済能力を過度にまで重視してきた。このような婚姻観は、経済の急成長とともに現れたものであり、時代色の極めて強い価値観のひとつである。彼らは、婚姻や家庭に関しての責任感が従来より弱く、個人の自由と経済的側面を強調するあまりに、家庭と社会の安定を脅かす事態を招いている。このような状況の下、筆者は彼らの家庭に関する責任感や婚姻観を巡って現地調査とデータ分析を行った。

本稿では晩婚・晩産やディンクス族、伝統社会における婚姻と家庭に関する価値観などにも注目し、社会の安定と伝統的な人間関係の維持のための家庭の役割が弱体化している現状について分析を行う。また、“80後”の独身者の状況について考察し、具体的には2つの部分に分けて考察する。ひとつは、結婚したい男女がさまざまな理由で結婚しにくい状況にあることについて分析する。彼らが相手の経済力や学歴、家庭的背景などを過度に重視していることから、多くの人が結婚に迷っていること、またそのために“剩男・剩女¹（売れ残り男女）”という社会現象を巻き起こしていることに注目する。もうひとつは、独身生活を享受し、結婚したがるがとくに悩むことなく、また都市部の“80後”の間で「レンタルフレンド」や「セックスパートナー」が話題となり、他方では、“80後”の「独身者」の親たちが極めて大きな不安を抱いており、両親による代理見合いの現象が多く見られることについて検討する。

1. DINKs（ディンクス）とその背景

2017年、“80後”の最年長者は37歳となった。河南省洛陽市福縁婚姻仲介会社の社長高輝傑氏によると、彼らの約9割が結婚しているのに対し、“70後”が37歳の時にはほぼ全員が結婚しているという。“80後”にとって、恋愛の自由や個性の追求などが晩婚の原因となっており、また晩婚化のほかに、子どもをもつ時期も遅くなっているようである。すでに結婚している“80後”夫婦の45.3%にはまだ子どもがいない。それに対し、“70後”においては、30代後半の時に子どもがいなかったのはたったの5.9%であった。まだ結婚したばかりの数年間、マイカーと家賃、ローンなどにかかる費用に加え、子どもの負担まで負いたくないと考えているからである。

中国の人口問題に詳しい米国ウィスコンシン大学の易富賢研究員によると、晩婚・晩産の背景には、主に人類社会の自然法則と人為的干渉（政策、法律など）があるという。ここでは自然法則について考えてみることにする。

経済の成長とともに国民生活の水準が高まり、子どもの養育にも沢山の費用が必要となった。目先の生活水準を高めるためには、当然ながら子どもの数を制限したほうがよい。そして究極には、子どもを作らないほうがよいとの考えまでが出てくる。経済面だけを考慮するとそうならざるを得ないのである。その証拠として、現在ほとんどの先進国では自然出生率が低下している。しかし、少子化や高齢化の問題が深刻化しているのもまた事実である。出生率の低下は、長期的には労働力の不足や消費能力の低下などの問題を引き起こすことになる。そのため、先進諸国では産児制限をせず、子どもの出生を奨励する政策まで打ち出している [平野健一郎1994]。

近年、中国では結婚しても子どもを持たない所謂ディンクス族に憧れている者が増えている。これは経済が発展している都市部でとくに多く見られる現象であり、また高等教育を受け、夫婦ともに就職している家族において、その傾向が顕著である。昔から中国では、“不孝有三、無後爲大²”という言葉が

¹ 28歳を超えた未婚の男性または女性を指す。男性を「剩男」、女性を「剩女」と呼ぶ。

あり、「不孝な行為は3つあり、その中でも子孫を残さないことが一番の不孝」というものである。ちなみに、他の2つの不孝行為は何かというと、「親を養わないこと」と「親の過ちを正さないこと」だという説もあるが、はっきりしたことは分かっていない。中華民国（台湾）科学技術文明研究所の張光翔氏によると、中国社会では、現在でも父系出自を重んじる家族規範が根強く存在し、「伝宗接代」という言葉が示すように、夫の家系の血統を代々存続させるために、嫁が男児を産まなければならないという伝統が残されている。そのため、嫁となる女性には結婚した時点から、出生の義務を負うことになる。そして、このような考え方は女性の社会進出が著しくなった今日でも根強く存在し、ディンクス族は社会からさまざまな圧力を受けることを覚悟しなければならない。とはいえ、家族に対するさまざまな責任から逃れ、もっと自由な生活がしたいと考えている若者は確実に増えており、近年話題になっている“80後”の婚姻問題や、家庭に対する責任感をめぐる論争がそれらを如実に物語っている。

2016年7月、中国社会科学院と『中国経済週刊』により発表された「中国都市発展レポート」によると、現在中国の都市部における中流階級³は約2.25億人に達し、そのうちの約3分の1は“80後”である。また、結婚している都市部“80後”のディンクス族を対象に、子どもを要らない原因について調査を行った結果、第1の理由が「中国の人口過剰問題に対する心配」であった。調査を受けた上海出身の範さん（37歳）によると、長期的に見た場合、中国では人口問題が最大の社会問題であり、個人と国家の将来を考えて子どもを作らないことにしたという。2つ目の理由は、「自由と気楽な生活を送るため」である。“80後”の両親の多くは50年代～60年代に生まれ、激しい政治運動を経験し、中国の伝統社会に厳しく縛られて生きてきた世代である。“80後”は両親たちの人生と生活状態をよく知っているだけに、より自由な生活を望んでいる。3つ目の理由は、「自己実現」である。“80後”の親たちはさまざまな理由により自分自身のための人生目標が持てず、ある意味では子どもを含む「他人」のために生きられた人生であった。それに対し、“80後”は自分の運命を把握し、自分の人生を自らの力で生きようとしている。そのため、結婚しても必ず子どもを生む必要はないと考える人まで現れるようになったのである。

中国社会科学院の調査によれば、彼らが子供をすぐに持ちたがらない理由は以下の通りである。

1. 現代社会における生存競争は厳しく、将来、子どもにまで同じ苦しみを与えたくない。
2. 自分の現在の生活と仕事を諦めたくない。
3. 現在の婚姻に対して自信がなく、離婚する恐れもある。
4. 経済の面で、子どものために安定した生活環境が提供できるまで努力したい。
5. 幸せの形はさまざまであり、子孫がいなくても幸福な生活は実現できる。
6. 子どもの養育は面倒で、子どもが楽しいとはまだ思っていない。
7. 人生の価値は子孫の繁栄と関係ない。
8. 老後の保障は、子どもに頼るだけではない。
9. 出生の苦しみを味わいたくない。

一方、筆者もまた多くのインタビュー調査を基に、“80後”がディンクス生活を選ぶ理由について纏めてみた。

1. 個人と社会および国家レベルにおいて、物の再生産だけを強調し、人口の再生産を無視している。つまり、個人と会社は金儲けを最優先し、国家もまた経済発展を最優先しており、人間社会のすべての領域において、金と物の再生産だけを強調しているのが現状である。とくに20代～30代の若者は社会に進出し始め、よりよい生活の実現や社会的地位のために結婚を遅らせており、また結婚してもすぐ

² この諺は『孟子』離婁編上から引用したものである。

³ 中国の「中産階級」についての定義はさまざまだが、その指標のひとつに、年収が30万元（約480万円）以上でなければならない、というものがある。

には子どもを産もうとしない。

- 2。短期的に見ると、物の創造は収益に繋がるが、人口の創造は収益に繋がらないかもしれない。そういった意味で、子作りを後回しにする。また、2016年における60歳以上の人口は約2億3,000万人を数え、全人口の16.7%を占めた。“80後”家庭にとって、若い世代は両親と祖父母の面倒を見ることが当たり前とされ、収入と支出のバランスを維持するために、子どもの出産を遅らせる人も少なくない。2016年からは「一人っ子」政策がなくなり、第2子を産んでもいいとされているものの、生活コストが高騰し、子どもの出産に対する経済的な支援政策がまだ明示されていない。中国人民大学社会法律学部の周孝正教授の指摘によれば、2015年の例でいうと、子どもを18歳までに養育するのに約22万7,000元（約362万円）がかかる。子どもの数が多ければ多いほど、養育にかかる限界費用⁴は低くなる。つまり、第2子の養育費は第1子の約60%で、第3子の養育費は第1子の約3分の1で済む。しかし、問題は現在の中国社会において、1人の子どもを養育するだけでも膨大な金がかかるのである。
- 3。避妊の普遍化。筆者が調査した“80後”のほとんどは避妊に関する知識をよく知っていた。1990年代以前は、避妊器具（コンドーム）を配布するのは「計画生育機関」の仕事であった。また「セックス」という言葉や「避妊」に関する話題はタブー視されていた。しかし今は、病院や薬局、自営業の専門店などで避妊器具が販売されている。そうしたことにより、「計画外」の出産が減ったと考えられる。
- 4。離婚率の上昇。中国国家統計局の資料によると、1978年における離婚者数は28.5万組で、2011年には211万組の夫婦が離婚している。離婚によって“単親家庭”（片親家庭）が激増し、さまざまな社会問題を引き起こしているのが現状である〔王敏 2011〕。筆者の調査によると、“80後”夫婦の多くは、相互信頼と夫婦の共同生活に十分な自信があるまでには子どもを作らないと互いに約束しているという。
- 5。不妊現象の増加。筆者が北京大学第一付属病院産婦人科の温宏武教授からもらった資料によると、中国人の不妊率は70年代には約1%～3%だったが、30年後の2001年には約12.5%までに上昇した。そして2002年には、17%を突破していることが分かった。なお、2001年の先進諸国における不妊率は約15%であった。2016年における中国衛生計画生育委員会の調査によると、中国では約5,000万人以上が不妊症で悩んでいるという。“80後”のディンクス族のうち、一部の人は子どもが欲しくても妊娠できないのである。

経済と社会の発展とともに、若い世代の子育てに対する認識が変わりつつあるが、ディンクス族の存在は将来的に、中国社会に対してさまざまなマイナスの影響を与えるに違いない。とくに、若い世代の家庭に対する責任感の不足は、やがて大きな社会問題につながるはずである。まず、人為的な不妊行為は、人類の繁衍という自然法則に反している行為である。子どもの養育を放棄したら、家庭や社会に対して責任を負わないところから、本当の「大人」になれないはずである。ところで、医学的な立場からしても、北京大学第三付属病院産婦人科副主任医師の李雲波氏が言っているように、女性は一生のうち、少なくとも1回の出産を経験したほうが自身の免疫能力の増加にとって有利であり、とくに適齢期に出産を経験しないと、女性の健康にはマイナスの影響があると指摘した。ディンクス族が後に考え方を改めて出産を選択しても、不妊症の恐れがあり、さらに高齢出生を選択することになるため、そのリスクを負わねばならないのである。

一方、“80後”のディンクス族は、伝統的な考え方を持つ両親にとって理解されず、大きな家族問題となっている場合が多い。ほとんどの老夫婦にとって、孫（孫娘）の出産は待ち遠しいものである。とくに都市部において、“80後”のほとんどが「一人っ子」のため、親たちは普遍的に孫世代を切望し、嫁の早期妊娠を結婚と同じように期待しているのが現状である。そのため、嫁がいつまでも妊娠しない場合、両

⁴「限界費用」とは、生産量の増加分一単位あたりの総費用の増加分のことである。

方の家族に緊張感が走り、嫁姑関係だけでなく、両家の関係にまでひびが入ることになる。従来より、結婚は当事者2人だけの問題ではなく、双方の家族間の問題でもあるという事実は今でも変わっていない。しかしながら、経済と社会の発展とともに、若い世代の考えが急変し、とくに結婚している女性が、自分は相手の家族のために子どもを生む機械ではないと主張するようになったのである。

今日、ディンクス族に対して理解を示す人が多くなったとはいえ、厳しい見方をする人のほうが依然として多数を占めている。例えば、ディンクス族を“個人享楽主義者”と見なし、さらには“無生育能力者”や“断子絶孫”（血筋の途絶えた人）などと批判しており、子どもの養育をめぐる伝統的な価値観が容易に変わらないことを物語っている。

2. “剩男・剩女”と見合い番組の流行

1) “剩男・剩女”と見合い番組

90年代の中国では、30歳前後の未婚者のことを“大齡青年”と呼んでいた。そして現在の“80後”は28歳～37歳になっており、そのうちのほとんどの人口がいわゆる“大齡青年”のグループに入っていると予想される。時代とともに、使う言葉も変化し、約10年前から“剩男・剩女”という言葉が流行するようになった。「剩」は「余剰」の意味で、“剩男・剩女”とは「売れ残りの男女」のことである。

とくに都市部では、生活の便利さ男女ともに独りでも容易に生活することができるようになった。そして、学歴と収入が高いほど独身傾向が強く、大学時代に結婚相手が決まらなかった場合、卒業後は仕事の忙しさから結婚がさらに後回しになってしまう。中国最大の出会い系サイト「世紀佳緣網」の責任者の話によると、全国における未婚男女の性比は28歳でおよそ199：100であり、なかでも35歳では293：100になっているという。また、都市部における28歳～37歳の“80後”独身男女の比例はおよそ162：100で、このような背景の下に、見合い関係のテレビ番組が人気を集めているのである。

例えば、近年に最も視聴率の高い見合い番組として、「非誠勿擾」（フェイチョンウーロー）というものがある。以下、この番組を通して、“80後”と“90後”の婚姻問題について考えてみることにする。

「非誠勿擾」は江蘇省の衛星テレビ番組のひとつで、2010年1月から放送されている。当番組では、若者たちの婚姻問題をめぐりさまざまな話題が展開され、多くの人に関心を寄せていることから、全国範囲で同類の番組が流行するようになり、長期に渡ってトップ視聴率を獲得してきた。この番組の主役は、いわゆる結婚適齢期になっている者、あるいは適齢期を過ぎて“剩男・剩女”となっている人たちである。参加メンバーは全てインターネットを通じて公募し、参加希望者は「非誠勿擾」番組のサイトで申し込んだり、または当番組と協力関係にある他のサイト、たとえば中国最大の出会い系サイト「世紀佳緣網」や「百合網」を通して申し込むことができる。

番組における恋人探しの基本ルールは、まず24人の女性が舞台上に立ち並び、それから男性が1人ずつその前に呼び出される。女性たちに自己アピールし、好きな相手を互いに選ぶというものである。前半は女性が主導権を持つ「女性による質問タイム」で、後半は男性が主導権を持つ「男性による質問タイム」である。学歴や職業、容姿、性格の異なる女性たちが出場者の男性に対してさまざまな質問をし、場合によっては意地悪な質問をしたりもする。また、気に入らないところがあればその理由を言いながら手元のボタンを次々に消していく。すべてのランプが消えたら男性はその場で退場することになるが、もし残っていれば今度は男性がその残りの女性たちに質問をし、最終的には男性が女性1人を選び、手をつないでその場を離れる。もちろん、好きな女性がいなければ男性はお礼を言って独りで退場することもできる。

図1：見合い番組「非誠勿擾」の現場写真



出典：「非誠勿擾」江蘇衛星テレビサイト <http://fcwrjstv.com> (2016年6月アクセス)

「KISS 福岡」九州国際観光広場サイト <http://kiss-fukuoka.jp/japanese.html#> (2017年7月アクセス)

このような見合い番組に登場した独身男女がどんな相手を見つけるのか、また見つけられるのか、さらには番組中に交わされるさまざまな結婚についての会話、専門家による分析、それらに対する主役や観客からの共鳴、それらをめぐる視聴者からの反応も随時紹介され、インターネット上でも公開される。このような番組は、若者や独身男女だけでなく、親世代の間でも絶大な人気を集めており、もはや一大社会現象になっている。

番組に登場する男女は、私生活や恋愛、結婚、家庭などについての考え方を大胆に分ち合い、積極的に質問をする。例えば、自分はこれまでに何回ぐらい恋愛経験があり、なぜ別れたのかに至るまで包み隠さず公開し、または皆から逆になぜ別れたのか、なぜこれまでに独身でいるのかなどと質問されたり、仕事や収入などについても忌憚なく質問することができるようになっている。

新中国成立以来、女性の社会進出が目立つようになり、とくに高学歴を持ち、独立精神の強い女性たちが結婚相手の選択にこのような見合い番組を利用することが多い。彼女たちの知的な会話のなかから、新世代の中国人女性の新たな思考様式や生活態度を垣間見ることができ、今日の中国社会を理解するためにもこのような番組は大いに役立っているといえる。

現在の中国では、とくに経済が発展した地域では「男女平等」や「女性権利」の意識が強く、男性と同等の立場に立って話をし、相手を探すインテリな女性も多い。また、拝金主義の影響で、男性の収入を過剰に意識する女性も多い。そのため、男性の結婚難はとくに深刻なものになっているのが現状である。以下では、具体的にどのような男性が結婚相手を見つけるために番組に登場し、またどのような会話が番組でなされているかを垣間見ることとする。

1. 馬さん（女性、22歳）と陳さん（男性、23歳）の会話

「私と一緒にサイクリングに行ってくれますか？」という陳氏からの問いに対し、馬氏は「BMWの中で泣く方がまだましだわ。」と答えた。女性は明らかな拝金主義者で、男性のプライドが傷つくよう

な返事をした。このような発言をする女性に対する視聴者からの批判の声も多く、その後女性たちにはより慎重な発言が求められるようになった。

2. 劉さん（男性、23歳）、いわゆる“富二代”（金持ちジュニア）

出場して簡単な自己紹介をした後、「おれの貯金は600万元（日本円でおよそ8,153万円）だ、君たちはお金がそんなに好きか、なら皆このおれと付きあえよ」と言い放ったところ、現場の多くの女性から激しく批判される羽目になってしまい、独りで退場した。

3. 潘さん（男性 32歳）と彼の母の発言

潘さんがまず「うちは上海や杭州などでいくつもの不動産を持っており、高級ホテルも所有しているんだ」と言い、観客席にいた母親も立ち上がり、「うちは嫁に対する要求が高い。俳優とモデルの仕事をしている女性は要らない。目の小さい者や太った者、家が貧困な者も要らない。とくに農村出身者の嫁は要らないね」と付け加えた。番組制作者が反響を引き起こすために、わざとこのように過激な発言をする親子を呼んだと思われるが、あまりにも社会的な影響が悪く、その後番組の方針が大幅に修正された。

4. イギリス人留学生 Alex さん（男性 31歳）

番組では彼を紹介するビデオが流れ、「Alex はペットボトルや鉄鋼の部品などのゴミを拾い集めることが好きで、廃棄物のリサイクルに熱心である」と紹介されたところ、24名の女性全員が手元のランプを消してしまった。その後、司会者と Alex は次のような会話を交わした。

司会者：失礼ですが、ご両親は何の仕事をしていますか。家族の経済能力は本当に大丈夫ですか？（冗談交じりの質問である）

Alex：父親はイギリスで3つの銀行を経営し、母親は芸術家です。

（現場では「えっ、嘘!?!」「信じられない!」と驚嘆の声があがった）

司会者：なるほど、お金は問題じゃない。で、何で毎日ゴミを拾うのが好きなんだ？

Alex：勝手にゴミを捨てる人が多いので困ります。ゴミ拾いは地球にもやさしいし、中国にはとくにゴミの問題が深刻だと思います。ゴミのリサイクルは私の趣味で、私は自分のこのような生活スタイルを享受しています。

司会者：いいね！君たち24人はきっと後悔しているだろう、ははー。

以上の事例により、現在の中国における若い世代にとって、穏やかで控え目な見合いの時代が終わり、粗野で無遠慮な恋愛トークの時代がやってきたと言えるのかもしれない。そこには、金銭や社会的地位、性別役割、家庭関係などをめぐる価値観の違いや、自分なりの答えを求めて彷徨う若者たちの姿の一面がよく映し出されているといえよう。

2) 見合い番組をめぐる問題点

中国社会では、今“80後”以降の若者の婚姻に関する価値観の変化と、結婚にかかる費用の高額化に伴い、多くの“剩男・剩女”にとって結婚難が大きな問題となっている。また、結婚年齢も次第に上昇している。テレビ番組の制作者たちはこのような状況にビジネスチャンスを見出したのである。2010年から各省・市のテレビ局が次々と見合い番組を発足させ、中国のテレビ娯楽番組はほとんど見合い番組の天下となったのである。これらの番組を通じて明らかになった婚姻観は、多くの人の注目を集めるようになった。見合い番組の人気に火がついた主な原因は、出演者たちが伝統的な婚姻観をひっくり返すような、大胆な発言をしているところにある。またこれにより、番組自体も多くの批判を受けるようになった。一部の出

演者はネットユーザーから「物質主義者」や「拝金主義者」と呼ばれ、テレビ局も商業化すぎると叱責された⁵。

中国広電総局⁶は2010年6月、「婚姻・恋愛・交際類テレビ番組の更なる規範化に関する管理通知」を發表し、各テレビ局の見合い番組に対し、出演者の身分を偽造したり、視聴者をだます行為を厳禁した。また、社会的イメージの悪い人物や、物議をかもしている人物を出演者として選んではならない。結婚・恋愛に関連することで出演者を侮辱または個人的に攻撃したり、低俗または性に関わる討論をしてはならない。「拝金主義」など、不健康で間違っただ婚姻観・恋愛観をテレビで見せたり、あおってはならないなどと要求した⁷。広電総局はさらに、「見合い番組は出演者の選択範囲を拡大するべきだ。俳優、モデル、金持ちばかりが出演するのは良くない」と注意し、「道徳に問題があったり、物議をかもしたり、間違っただ、もしくは非主流の価値観、恋愛・婚姻観を持つ人物は番組に出演させてはならない」とした。一方、2012年から人民日報、新華社、中国中央電視台の3大政府メディア機関からも、見合い番組のマイナス影響について次々と批判をおこなった。批判の主な内容は以下の通りであった。

1. 見合い番組の内容や形式は似たり寄ったりで、盗作が多い。
2. 番組が「拝金主義・享楽主義」に傾いており、感情のやり取りを無視している。
3. 盲目的に視聴率を追い求め、故意に敏感な話題を作り出し、視聴者の好奇心を刺激している。
4. 女性出演者が頻繁に「スキャンダル」を引き起こす。
5. 番組は言葉の暴力を増幅させ、下品な内容を扱い、低級な趣味を流行させている。

しかし、今回の政府機関およびメディアによる見合い番組への批判は、テレビ番組の発展にとってプラスとはならないと見る人もいる。中国伝媒（中国メディア）大学新聞伝播学部の崔永元教授は、「見合い番組の中には、中国社会の現実を反映した部分もある。番組のマイナス影響に対しても、視聴者は一定の免疫力を持っている。一方、一切の悪影響の真実を禁止した後、テレビ番組が社会問題を鋭く反映できず、偽物の平和と繁栄だけを見せても意味がない」と指摘した。

3. 独身者とセックスフレンド

結婚に関して、「親の命じる事、媒酌人の言う事」に従わなければいけない時代もあったが、時代の変化に伴い、現代の若者は自由に自分のパートナーを選択するようになった。また、生活コストの上昇や仕事上のストレスにより、「適齢期」の男女が結婚に対してますます慎重になっているのが現状である。

ひと言で独身といっても、いまは独身だが、これから結婚したいと考えている者、いまは単身で、これからは結婚したくないと考えている者、離婚をして現在もさまざまな理由により独身生活を続けている者など、さまざまである。これらの独身者は結婚している人と同じように、セックスに対する要求があることには間違いない。そのため、今日の中国（とくに都市部）では売春や同性愛、セックスフレンドなどの問題が噴出している。

かつての中国では性教育が普及せず、性交渉に対する規制も強く、性的な描写をした写真や小説は厳しく取り締まられた。しかし「改革開放」とともに、情報が溢れるようになり、若者の乱れた性が一部では問題視されるようになった。“80後”の独身者にとって、伝統的な性モラルの遵守と同時に、グローバル

⁵ 出典：「国内見合い系番組の現状分析」「人民網」サイト 2010年10月
<http://media.people.com.cn/GB/22114/52789/205663/13052203.html>

⁶ 国家新聞出版広電総局：中国國務院の直属機構で、中国全土のテレビ、ラジオ、新聞、出版社及びネットメディア会社を管轄する機関である。略称は広電総局。

⁷ 出典：「西方学者は中国の見合い系の番組低俗化に対する批判」「人民網」サイト2010年5月
<http://culture.people.com.cn/GB/87423/11738265.html>

化の影響でさまざまな価値観、とくに性に対する考えも多元化してきた。

本研究では、若い世代の売春や同性愛などの問題をすべて取り上げる余裕はないが、都市部における“80後”ホワイトカラーを中心に、彼らのセックスフレンド（以下、セフレと略す）の問題について考えてみたい。

筆者は2011年～2017年にかけて、北京市朝陽区 CBD 地域において、“80後”のホワイトカラーに対してセフレに関するアンケート調査を実施した。調査の結果により、地域内の人口構成と“80後”の婚姻状況、およびセフレの現状が明らかになった。

2011年3月、中国社会科学院により発表された「2011年中国都市部ホワイトカラーの性生活についてのレポート」によると、セフレを持つ割合の分部で、北京、上海、広州に暮らす者の16.9%、その他の大都市（チベットと台湾を除く）に暮らす32.9%の若者がセフレを持っている。また、一般都市と農村に暮らしている者では、50.2%という高い数値が示された。年齢層別では、20歳未満で2.3%、40歳以上で20.7%、20歳～40歳までの者で77%を占め、なかでも、当時20歳～30歳までの“80後”は41.8%を占めている。セフレの数については、5人以下と答えた者が57.3%を占め、10人までと答えたのが16%で、10人以上と答えた者が26.7%も占めていることが分かった（表1を参照）。

表1：2011年中国都市部ホワイトカラーの性生活についてのレポート

地域			年齢層		
北京	上海	広州	16.9%	40歳以上	20.7%
省都			32.9%	31-40歳	35.2%
地級市			24.3%	20-30歳（80後）	41.8%
中小都市			13%	20歳以下（未成年）	2.3%
農村部			12.9%		
セフレの有無			セフレの人数		
未婚	無し	7.2%	5人以下	57.3%	
	1人	16.5%	5-10人	16%	
	複数	5.1%	10-15人	13.2%	
既婚者	無し	34.4%	16-20人	2.6%	
	1人	10.9%	20-30人	3.2%	
	複数	23.8%	30人以上	7.7%	
離婚者	1人	1.4%			
	複数	0.7%			

注：「2011年中国都市部ホワイトカラーの性生活についてのレポート」をもとに筆者が作成

表1のデータは、2011年におけるホワイトカラーのセフレについてのデータである。当時の“80後”についてのデータを見ると、他の年齢層に比べてセフレを持つ割合がより高いことが分かる。地域別の情報と合わせて見ると、49.8%を占める大都市におけるセフレを持つ“80後”の割合は、全国平均の41.8%より高くなっている。“80後”は、経済が急速に成長した時代に生まれ育った世代であり、グローバル化とともに輸入される外国文化や思想の影響を受け、セックスに対する考えが変わってきたといえる。また、結婚と家庭についての価値観の変化により、“80後”の一部は結婚と固定的な恋愛相手に興味が無くなっている傾向がある。金銭関係⁸が無く、簡単にセックスできるパートナーと同居している者が増えてきたのである。表1のデータは全国範囲での調査結果を示しており、“80後”の状況を把握するのにも好都合である。

⁸ 金銭と関係ないセックスは、短期と長期、知人と知らない関係を問わず、セフレ或いは同居相手を含むものとする。一方、直接的な金銭関係には援交や売春などが含まれる。

1) 2011年の“80後”セフレ調査結果

“80後”のサンプルを研究するために、筆者は2011年6月から北京市朝陽区のCBD⁹地区で働いている880人の“80後”ホワイトカラーを対象に、第1回のセフレについてアンケート調査を行った。今回の調査では、性別や年齢、婚姻状況、セフレの人数などを調べ、“80後”ホワイトカラーのセフレについての現状が一部明らかになった。ところで、2011年12月31日まで、調査を受けた880人のうち、746人から回答を集めることができた¹⁰。そのうち男性が200人で、全体¹¹の26.81%を占め、女性は546人で73.19%を占めた。なお、結婚している者は441人で、全体の59.12%を占めている。独身者（離婚とその他の場合を含む）は305人で、全体の40.88%を占め、セフレの数について、「無し」と答えた者は157人¹²で、全体の21.05%を占めた。1人を持つ者は89人で11.93%、2人以上（2人を含む）と答えた者は326人で43.67%、4人以上を持つ者は95人で、全体の12.85%であった。そして、2011年の時点でセックスの経験がない者は25人で、逆に20名以上を持つ者が54人いることが分かった（表2を参照）

表2：2011年、北京朝陽区CBD地域の“80後”のセフレ調査（対象全員746人）

性別		婚姻別					
男 200人	無し	28人	14%	既婚 441人	無し	106人	24.1%
	有り	172人	86%		有り	335人	75.9%
女 546人	無し	129人	23.62%	独身 305人	無し	51人	16.8%
	有り	417人	76.38%		有り	254人	83.2%
セフレの人数							
無し		157人	21.05%				
1人		89人	11.93%				
2人以上		326人	43.67%				
4人以上		95人	12.85%				
20人以上		54人	7.2%				
性経験無し		25人	3.3%				

註：2011年6月～12月、アンケート調査の資料をもとに筆者が作成

表2によると、セフレを持つ者が589人であり、全体の78.95%に達しており、“80後”年齢層の全国平均比率の41.8%に比べ、37.15ポイント高いことが分かった。男女別に見ると、男性の200人中セフレを持つ者が86%を占め、女性の76.38%より高いことが分かった。婚姻状況別に見ると、結婚している441人中、セフレのいない者が106人で、結婚している全員の約4分の1を占めている。一方、残りの4分の3はセフレを持っていることが分かった。結婚していながら多数の者がセフレを持つ結果については、筆者が事前に予想していないものであった。独身者グループを見ると、家庭の責任と婚姻関係の規制がないため、83.2%の独身者がセフレを持ち、圧倒的に多い割合を占めている。一方、セフレを持たない者は少数であることが明らかになった。

都市部“80後”にセフレを持つ者が圧倒的に多い原因について、今回の調査では経済発展が著しい北京市であったことが挙げられよう。また、調査対象としての“80後”746人は、全員が5万～15万円の年収をもらっている者である。彼らは大学とそれ以上の高等教育を受け、さらに留学した経験のある者もいる。

⁹ 中心業務地区と呼ばれ、英語では central business district、略称は CBD である。都市において官庁、企業本社、大規模商店などが集まっている地区である。

¹⁰ 提出しなかったアンケートと大切な項目を記入しなかった場合は無効にした。

¹¹ 調査を受けた880人のうち、有効となった746人のケースを指す。

¹² セックス経験のない25人は除いた。

都市部“80後”のセフレグループの共通点と言えば、高収入で高等教育を受けていることであろう。一方、全国的に見れば、教育や経済、文化などの格差により、調査結果もまちまちであることが予想される。中国青年政治学院・社会科学学院副教授の陳涛氏が言ったように、現在の中国社会において、性に対する価値観はまだ保守的なものが主流である。ある小さな範囲における調査ではその特徴がはっきり現れるが、全国範囲における問題を説明するには無理がある。

以上は、マクロ的に見た都市部“80後”のセフレ問題についての調査と分析であり、以下では、調査を受けた者の話を通して、ミクロの視点からさまざまなケースを分析する。

1. 性経験のない単身者 張婷（女性、23歳）

セフレに対しては「全く理解できないし、全然認めない」と言い、セックスと恋愛については「恋愛の時は手や顔などにキスするのはいいが、口はダメ」、「結婚した後にセックスをすべき」と言った。

2. セフレ4人を持つ既婚者 梁潤東（男性、28歳）

「セフレは以前の彼女だ。それは現在の婚姻とは関係ない」セックスと恋愛については「初恋ははっきり覚えていないが、最初にデートしたときにセックスした」。しかし、現在の奥さんに対しては「彼女がセフレを持っているかどうかは分からないが、もしそんなことがあったら絶対に許さないだろう」。

3. セフレが無しの既婚者 沖沢（男性、27歳）

「現在は結婚しているから、そんなことをしたらやばいと思う。でもチャンスがあったらやってみたい。問題はセフレを探す方法が分からない」。現在の奥さんについては「2年前に結婚しており、非常に愛している」。

4. セフレ10人を持つ単身者 張嶺（男性 24歳）

「初めてのセフレは大学時代の同級生で、現在はいつも会社の同僚から探す。たまにインターネットで探すことも」。将来の婚姻に対しては「自由な生活が好きだ。セックスの方はやっぱり相手が異なったほうが楽しい」。金銭関係については「売春じゃない。でも、相手と一緒に食事をして、いつも男性の方が払っている」。

5. セフレ人を持つ独身者 戴韓美（女性 25歳）

「20歳に結婚し、子どもは1人」。離婚の原因については「セフレと一緒にいるところを見つかった。旦那は許さないと言って離婚をした。また、そのせいで子どもの扶養権も剥奪された」。

以上の例からも分かるように、同じ年齢層でも、人によって恋愛と性についての考えはそれぞれである。高等教育を受け、経済的に豊かな生活をしていても、伝統的な価値観と純愛を信じている者がいる。しかし、そういう人はあくまでも少数である。一方、張嶺氏のように考えている人はかなり多いようである。また、沖沢氏のような場合は、その気持ちがあり、将来的には探すかもしれない。“80後”はこれから結婚をし、家庭を築いていく世代であり、性や結婚に対する考え方がますます多様化していくと思われる。

2) 2017年の“80後”セフレ調査結果

2016年5月～2017年2月まで、筆者は北京市朝陽区CBD地域で働く“80後”のセフレをめぐる2回目のアンケート調査を実施した。今回の調査により、経済的に発展した北京市に暮らす“80後”ホワイトカラーの現状の一面を考察し、6年前の調査時に比べて大きな変化があったことが分かった。

今回調査を受けた人のなかには、前回に協力してくれた一部の人を含め、男女それぞれ250人で、全員500人分の調査結果を回収することができた。まず、“80後”の人口数については、朝陽区で就職している“80後”の人口数が6年前に比べて大幅に減少していることが分かった。筆者は、特定の会社とビルを調査対象にするのではなく、CBD地域の中心部にある地下鉄国際貿易センター駅前でランダム調査を実施した。調査を受けた500人において、結婚している人は390人で、全員の78%を占めた。また“北京人”（北京出身者）¹³は38人で、調査を受けた人の約8%を占めた。結婚率から見ると、6年前の約59%から2017年までの約78%に上昇した。全国平均の約90%より低いことが明らかになった。

表3：2017年、北京朝陽区 CBD 地域の“80後”セフレ状況（500人）

男女別				婚姻別			
男 250人	無し	132人	52.8%	既婚 390人	無し	285人	73%
	有り	118人	47.2%		有り	105人	27%
女 250人	無し	153人	61.2%	独身 110人	無し	0人	0%
	有り	97人	38.8%		有り	110人	100%
セフレの人数				有り	註： 1、38人の北京出身者は全員既婚 2、独身者には離婚者を含む		
無し	285人	57.2%	215人				
2人まで	0人	0%	0%				
3～5人	91人	18.2%	42.32%				
5～10人	19人	3.8%	8.83%				
10人以上	105人	21%	48.83%				
性経験無し	0人	0%	0%				

註：2016年5月～2017年2月の調査資料をもとに筆者が作成

表3が示すように、サンプルとしての朝陽区 CBD 地域で通勤する500人の“80後”において、セフレを持つ者は215人であり、全体の43%を占めている。2011年の75.6%に比べて明らかに減っていることが分かった。男女別に見ると、250人の男性のうち、セフレを持つ者が118人で男性全体の42.7%を占め、女性は97人で女性全体の38.8%を占めていることが分かった。婚姻別に見ると、調査を受けた500人において既婚者が390人で、そのうちセフレを持つ者は105人で、既婚者の27%を占めている。逆に、セフレのいない人は全体の4分の3を占めている。なお、6年前のセフレを持つ“80後”既婚者数は、逆に既婚全員の4分の3を占めていた。これは筆者が事前に予想していなかったことである。一方、離婚者を含む独身者110人は、全員がセフレを持っていた。さらに、10人以上のセフレを持つと答えたほとんどの人は独身者であることが分かった。

調査を受けた“80後”の経済状況には、6年前と比べて極めて大きな変化があった。いまの彼らは、6年前に年収5万～15万元（約240万円）をもらっていたホワイトカラーのことを単なるサラリーマンとして位置付けている。現在は、平均年収が20万～30万元（約480万円）あって、やっと中流階級と言えるからである。多くの「外地」出身者が話しているように、北京で働き続ける同世代の人数は、数年前に比べて大幅に減った。激しい競争と厳しい仕事のストレスに耐えられず、多くの人が北京を離れてしまったのである。現在、北京に残された「外地」出身の“80後”はみな大変優秀な人ばかりかもしれない。

セフレ無しの既婚者 陽峰（男性 35歳）

「結婚後の数年間はセフレを持っていたが、妻が子ども出産してから、一切の不倫関係をやめることにし

¹³ 調査を受けた人の中で、北京戸籍を有する“80後”は62人がおり、外地出身者と違い、ここでは北京出身者を指す。

た。自分の子どもを初めて見る瞬間、夫と父としての責任感が心の深いところから噴出し、涙が止まらなかった。妻と子ども及び家庭に対する罪悪感と責任感を深く感じるようになった」。

調査の結果、陽峰氏のような「セフレ無し、子もち」の“80後”既婚者は多数を占めていた。結婚したばかりの数年间は、婚姻関係においても個人的な独立性を強調し、相対的に自由な生活を追求することが多い。それが6年前の75%以上を占める“80後”既婚者がセフレを持った理由となった。一方、子どもの出産が彼らの転換点となり、夫婦双方とも関心が家庭関係に戻り、自分の次世代を正視する際に家庭と婚姻の意味がより深く理解できるようになったかもしれない。北京鴻縁婚姻仲介センターの楊宏旭主任は“80後”既婚者について、「“80後”以降の若い世代は、自由な価値観を持ち、自由恋愛の下に結婚する人が多い。愛情から生まれる自発的な制約力は、世の中の法律や習慣、ルールなどよりも強い。一定年齢になると、人生と家庭に対する理解も変わってくる」。つまり、6年前の“80後”既婚者たちには、結婚しても家庭に対する明確な価値観が形成されていないといえる。自分の子どもを生むまで、不倫関係などを経験した人は、逆に貴重な家庭と責任の重要性についてより深い認識があるのかもしれない。

セフレ8人を持つ独身者 芳蘭（女性 32歳）

調査を受けた人のうち、複数のセフレを持つと答えた女性は少数派であった。芳蘭はオーストラリアに留学した経験があり、現在はある国家メディア機関で管理職を担当している。セフレについて、「20歳の時、友達の誕生日パーティーの現場でセフレの初体験をした。その後、自由な男女関係が好きだったし、自由な人生を享受し続けたいと思った。現在はセフレの達人と言える私は、週4回も異なるセフレ相手に声を掛けることがある。外国で習得した経営学（MBA）知識で8人のセフレ相手を管理し、慎重なスケジュールに従い生活している」。とくに彼女は、セフレについて恥ずかしいことではないと強調する。ところで、婚姻と家庭については以下のように話した。「帰国した2年後、両親の代理見合いで結婚したことがあったが、夫との人生経歴や価値観などで差が大きく、または規制の多い性生活に慣れないため、2年未満で離婚した。北京戸籍や金銭面でも問題がないため、今後は1人暮らしを楽しみたい」。

芳蘭のようなケースは、都市部における“80後”富裕層に多い。彼らには結婚難の心配がなく、結婚後のさまざまな問題を直面する必要もない。留学、あるいは独り暮らしを経験している者は、問題解決の能力も高い。芳蘭はさらに性について、「お腹がすいたら家の台所で料理を作る代わりに、外のコンビニで弁当を買うことにする」という比喻で筆者に説明してくれた。

セフレ10人以上を持つ独身者 孫強（男性 30歳）

調査した結果によると、10人以上のセフレを持つ者は単身者グループに集中していた。なかには、離婚して独身生活を続けている者もいる。調査を受けた孫強氏は湖北省出身で、転職と収入などの問題により北京戸籍が取得できなかった。または数回の見合い婚活に失敗した経歴をもち、いまは結婚を完全に諦めた。筆者は孫強氏に対する調査をきっかけに、現在中国で流行している“約炮神器”¹⁴という出会い系アプリケーションを知った。中国の「搜狐網」が2017年1月に実施した世論調査により、一番人気な“約炮神器”トップ10は以下のようなものである（図2・表4を参照）。

¹⁴ 約炮神器：中国で流行しているセフレ関係（one night stand partner）の相手を探すスマートフォン専用のアプリケーションの総称である。

図2：2017年中国“約炮神器”トップ10



表4：2017年中国“約炮神器”トップ10

順番	名称	名称(別称)	ユーザー人数(万人)	作動環境
1	微信	We chat	8億4,600万	Android/iOS
2	陌陌	モモ	6億7,500万	Android/iOS
3	遇见	ユーケン	6億1,000万	Android/iOS
4	友加	ユウジア	2億3,000万	Android/iOS
5	秀色	シューセ	約1億	Android/iOS
6	同城情人	同情愛人	8,500万	iOS
7	某某	モウモウ	4,300万	Android
8	Say HI	Say HI	4,000万	iOS
9	約単	ヨーダン	不明	Android/iOS
10	想愛愛	シャンアイアイ	不明	Android/iOS

註：「ネットユーザー世論調査」[搜狐網] サイト http://www.sohu.com/a/124862082_1174162037 による資料をもとに筆者が作成

孫強氏は、自分のスマートフォンでインストールした各種の出会い系アプリを使ってセフレを探すという。彼は同じ相手と二度と会わないことを原則にし、セフレ探しをしている。「それは私の生活スタイルとなり、生活と仕事中に貯まるストレスに対し、セフレを探すことはストレスを解消する良策だ」という。確かに、科学技術の発展に伴い、日常生活がより便利になったのかもしれない。筆者は調査するなかで“80後”、“90後”だけでなく、多くの中国人が出会い系アプリを使っていることが分かった。

4. レンタルフレンドと代理見合い

2017年1月28日は、中国の旧暦における大晦日（春節前夜の除夕）であり、とくに中華圏では最も重要な祝日とされている。故郷を遠く離れて生活している人びとにとって、春節は帰郷・望郷の時期であり、帰郷を果たしてこそ親孝行であり、また家族の幸せといえるのである。春節の風習として、年配者に対して長寿の祝いを行い、家族全員が過去1年間の生活についていろいろと話し合いながら、一家団欒のひと時を過ごす。若い世代は話題の中心になりやすく、独身子女がいれば、結婚の話題で持ち切りになりやすい。

近年、多くの“80後”はさまざまな原因で結婚難に面しており、家族からの重圧を受けながらの帰郷となる。そのため、親を安心させるためのレンタルフレンドが流行し、また両親サイドからは子女の帰郷に備えて「代理見合い」を行うことが流行るようになった。両親は子どもの婚姻問題を心配するだけでなく、子ども出産から最終学歴を終えるまで、さらには孫世代の出産にいたるまで気かけ、なんとか力になりたいとしている。“80後”は「計画生育政策」を実施してから生まれ育った最初の世代として、中国の家庭において最も過剰な関心を集めてきたのである。本研究では、中国におけるレンタルフレンドと代理見合いの現象に注目し、“80後”の婚姻問題にかかわる種々の社会問題について考察する。

1) レンタルフレンド

レンタルフレンドとは、まだ結婚相手が見つからない“80後”たちが帰郷する際に、家族を安心させるために知人もしくは知らない人を一定の条件の下にレンタルした、臨時の「恋人」のことである。「恋人」は主人公とともに帰郷し、家族の前で数日にわたって恋人としての演出をしなければならない。そして、休暇が終わり、仕事場に戻ると「恋人」の契約をすぐに解除しなければならない。春節近くになると、このような現象をめぐるマスコミの報道も多くなる。とくにインターネットが普及してから、レンタルフレンドに関する情報が氾濫し、需要の多いことを物語っている。

以下は、2016年12月に中国最大のネットショッピングのサイトである「淘宝网」（タオバオ）に掲載されたレンタルフレンドに関する求人広告の事例である。

「私は山東省出身で、32歳の男性である。現在、深セン市大疆創新株式会社に勤務中。以下の条件により、今年の春節一緒に帰省する“臨時新娘”（臨時的な花嫁）を募集する。

1. 対象：24歳未満の女子大生で、広東省深セン市在住の者（要写真）

（深セン市外の場合は交通費を別途支給）

2. 仕事の内容と代金：

1) 勤務先：山東省煙台市（深セン市までの往復路を含む）

2) 基本給：春節休暇の10日間で、1日につき600元（約1万円）

3) 追加項目：帰郷時における掃除、洗濯などの家事労働は、1時間につき50元

4) 両親とのショッピングや談話など：1時間につき100元

5) 飲酒：白酒（45°～75°）100ml／50元、ワイン300ml／170元、ビール／500ml／20元

6) スキンシップ：抱擁50元／1回、キス100元／1回（性交渉は無し）

7) 宿泊：同じベッドでの宿泊は300元／1泊、違うベッドでの宿泊は50元／1泊、ソファや床などでの宿泊は50元～100元／1泊。なお、サービスは内容により拒否可

8) 支払い方法：現金、Wechat、Alipay（電子マネー）での支給可

9) その他：家族や親せきからもらった金銭（礼金）は後で返上すること

以上の事例からも分かるように、“80後”の一部は厳しい結婚難に直面しており、家族からの強い圧力を受けながら暮らしている。彼らは家族を一時的に安心させるために高い代価を払ってまで、恋人をレンタルして帰郷する場合がある。一方、応募者のほとんどは金銭目当てであり、人間関係や親子の情に対しても細かい値段を付けてしまうのである。

もちろん、レンタルフレンドと一緒にあって親を騙す行為については賛成し兼ねるが、過剰に心配症の親のためには仕方のない苦肉の策といえるのかもしれない。また法律の面からすれば、レンタルフレンドの契約関係には多くの問題点があり、現在の法律ではたとえ被害があっても保護されない状態である。北京市高級人民裁判所の池強氏の話によると、レンタルフレンド関係は正式な雇用関係と違い、人間を金銭

で貸し借りしているため、ある意味では人身売買のような性格をもっている。また、男女は婚姻関係を結んでおらず、厳密には不法同居になるといえる。さらに、「雇用される」側がそのレンタル期間内に相手の家族からもらう金について、法律的な規制がないため、金銭詐欺罪に問われる恐れもある。また実際に、レンタルフレンドの名目による詐欺や盗難などの犯罪事件が発生している。

レンタルフレンド関係を基に、双方が本当の恋愛関係にまで発展するケースもまた発生している。そして、“80後”の独身者にとって、レンタルフレンド関係は異性との相互理解を進めるリハーサルになっている場合も多い。たとえば2010年1月、安徽省のテレビ番組で紹介された事例として、王さん（男性、31歳）は友人の紹介で劉さん（女性、28歳）と知り合った。王さんは1,000円で劉さんを雇い、彼女を故郷に連れて帰った。レンタル期間は3日間で、その間2人とも本気になって付き合うようになり、正式な恋愛関係に発展した。最初に約束した1,000元を支払う必要もなくなり、王さんは独身生活に終止符を打ち、円満な結果を結んだのである。このような事例は現在の“80後”において稀に起こる出来事ではあるが、独身者たちの結婚難を解決するひとつの有効な手段になっているともいえよう。しかし、中国最大の出会い系サイト「世紀佳緣網」の責任者の話によると、中国におけるレンタルフレンドの事例については新聞やテレビ、とくにネットメディアによって紹介されたものが多い。

2) 若者による「見合い大会」

2016年7月20日、北京市政府部門の主催で北京市西城区にある梅地垂ビルで約3,000人が参加した「見合い大会」が開かれた。北京市民政局婚姻登記処の梁梅氏は、「独身の若者が大きな社会問題になっている。その対策として市政府は、“80後”と“90後”の単身者のために、自分の魅力をアピールする。ステージを作り上げる…」と挨拶した。2016年の人口統計によると、“重男軽女”（男子選好）の家庭が増えた結果、中国全体で男性が女性より3,000万人以上多い状況となった。「見合い大会」に参加したある男性は、「一人っ子政策と男児選好の古い考え方のため、我々はいま恋人を探るのが難しい」と嘆いた。しかし筆者の調査によると、晩婚化および結婚難の原因は男女比率以外にもたくさんあるように感じられた。

大会の主催機関からもらうデータによると、大会に参加した男女はほとんど北京以外の出身者であり、また数少ない北京戸籍を有する参加者も地方生まれであることを確認した。多くの参加者は自己紹介の時、戸籍現状のほかに入入、職種などの経済的な状況を中心に話していた。

中国吉林省出身の王瑤（女性、34歳）の事例を見てみよう。彼女は卒業後に北京で就職した。まだ北京戸籍は取得していないが、年収約12万元（約192万円）のOLである。仕事があまりに忙しかったため、普段の生活では男性と出会うチャンスが少ないという。ネットに掲載された広告を見た瞬間、大会に出席することにした。会場において、ある男性から「恋人の条件」を聞かれ、「具体的な条件はないけれど、感じのいい人ならいい」と答えた。その後、筆者が個別に話しを聞くと、「私は外地戸籍で、北京では家を持っていないので、男性は家を持っている方がよい。そして車も。相手の年収は25万元（約400万）ぐらいあればありがたい…」と具体的に話してくれた。さらに、相手の顔と体型については、「外見だけでは食べていけないので、とくに聞かない」と言った。なお、王さんのように経済力を結婚の第一条件と考えている女性は多いように感じられた。

会場には、独身男女のプロフィールが壁一面に貼られていた。その情報をよく見てみると、顔写真はなく、主に身長や戸籍、学歴、年収、職種などが書かれていた。現場スタッフの話によると、顔写真がないのは肖像権のほかに、参加者の職業や年収などが重要であって、顔は会ってから見ればよいとのことであった。

また、恋愛がうまくいかない人を対象に、専門家による相談コーナーが設けられていた。「こちらに来られる男性のほとんどは、家を持っていないために結婚できない人だ」と相談コーナーの劉先生は言った。今の中国では、家を持っていないと、女性と交際すらできないという異常な現象が多く見られる。都市部

では住宅価格が高騰し、若者の収入でマイハウスを購入するのは至難の業である。専門家は、「家なしで結婚するには、十分に話し合い、経済力以外の魅力をいろいろとアピールするしかない」と言った。

この「見合い大会」に参加して、経済的条件で悩んでいる多くの若者たちの姿が見て取れた。「見合い大会」は30代半ばの“80後”にとって出会いのチャンスを与えてくれたものの、経済的な条件にのみこだわる間では結婚相手を見つけるのは難しいように思われた。

3) 代理見合い

結婚難を解決するために、代理見合いも流行っており、春節などの長期休暇に備えて親たちが活躍しているのが現状である。代理見合いとは、恋愛を面倒だと感じる子どもに代わり、親同士が代わりに見合いをして、子どもたちの結婚を決めるというものである。親同士が子どものプロフィールを持って、子どもの魅力をアピールする。親同士のカップリングができれば、子ども同士が会うことになる。ちなみに、現在の中国各地では、とくに都市部では、単身者の親たちが街の広場や公園に集まり、子どもたちの結婚相手を探すために積極的に活躍している姿をよく見かける。子どもの写真や履歴を書いた看板を手に持ち、他の親たちと交流する姿が公園の一角で見られ、親たちがよく集まる場所は自然に「代理見合いコーナー」を形成する。

昔の中国でも、親による代理見合いは多かった。当時はまだ若い世代が自分の愛情と未来を自ら選択する権利や習慣がなかった時代で、仲人の紹介により、双方の親の合意のもとに結婚を決めたのである。ところが、中華民国期から、都市部では両親による代理見合いの風習が減少するようになり、自由恋愛が主流を占めるようになっていった [李銀河1991]。そして、中華人民共和国の成立から改革開放までは、伝統思想が復活して自由恋愛が再び制限され、1978年ごろになってようやく人びとの考え方がオープンになり、男女の自由恋愛と結婚が提唱されるようになったのである。

ところで、本研究で述べる代理見合いは、昔の代理見合いとは性格を異にしている。今日の場合、親たちが“剩男・剩女”になっている子ども、および“80後”独身者の婚姻問題を心配しているあまりに、公共の場で積極的に嫁や婿探しをしているところにその特徴がある。なかには、子どもが結婚したい場合もあれば、まだ結婚したくないと思っている場合もある。親たちは子どもの個人情報¹⁵を自ら作成し、親同士のネットワークを形成していくのである。

①「代理見合いコーナー」

中国の大都市における“80後”は、概して厳しい生活の圧力と職場の競争を強いられており、結婚についてまだ真剣に考える余裕が持てない者も少なくない。そのため、独身者が年々増加し、“80後”の晩婚化も深刻化してきている。彼らの代りに、親たちが行動を起こしたのである。現在、中国において「代理見合いコーナー」が全国範囲で増えていると言われている。例えば、北京では中山公園、海淀公園や玉淵潭公園などがそうである。このような現象は、筆者が知っている範囲では中国だけにみられる現象であり、現代中国における“80後”の結婚問題を象徴する風景のひとつといえよう。最初に代理見合いの場所は2005年ごろから週末ともなれば、公園では張り紙が多く見られ、子供の結婚相手を探している親たちの姿が目立つようになった。そして、関連業者も情報の収集と交換のために集まって来るようになったのである (図3を参照)。

図3は、毎週末に中山公園の各地で見られる結婚相手の募集に関するチラシ広告である。写真中の母親っぽい女性は、1日の代理見合いの中で大変疲れた様子である。図3のチラシの一部を紹介すると以下のようである。

¹⁵ 年齢や身長、仕事、年収、学歴などの情報に関するチラシまたは看板を作成し、公開する。

図3 結婚相手の募集広告



註：以上の写真は、筆者撮影

事例1. 北京出身の女性、1988年生まれの29歳、身長182センチ、外資系銀行に勤務、容姿淡麗で家族の経済能力も良好、相手に対する要求は身長が180センチ以上、車とマイホームを持つ実力男性が好ましい。

事例2. 天津出身の女性、1988年生まれの29歳、身長171センチ、上海復旦大学大学院修士課程修了、美貌、北京市政府機関に勤務、相手に対する要求は身長が175センチ以上、北京戸籍有の者のみ相談可。写真でも分かるように、ポイントは見合い活動に参加している人びとに若者の姿が全くいないということである。それに対し、親たちの真剣な代理見合いの風景は随所に見られる。写真の左側には「見合いコーナー：仲介ボランティア」という看板が立たられ、林氏という仲介者の紹介により、2005年から現在まで成婚したケースが多数あるという内容が書かれている。会場には子どもの親と見られる人たちが多く集まっており、嫁や婿を念入りに物色している様子である。写真の右側には、ある父親が他の親と子どもの写真を交換している様子が映っている。子どもの宣伝看板を胸に抱えているその姿から、子を思う親たちの一生懸命さがよく伝わっている。傍にいる他の親もまた彼らの会話に聞き入りながら真剣に写真を見つめている。

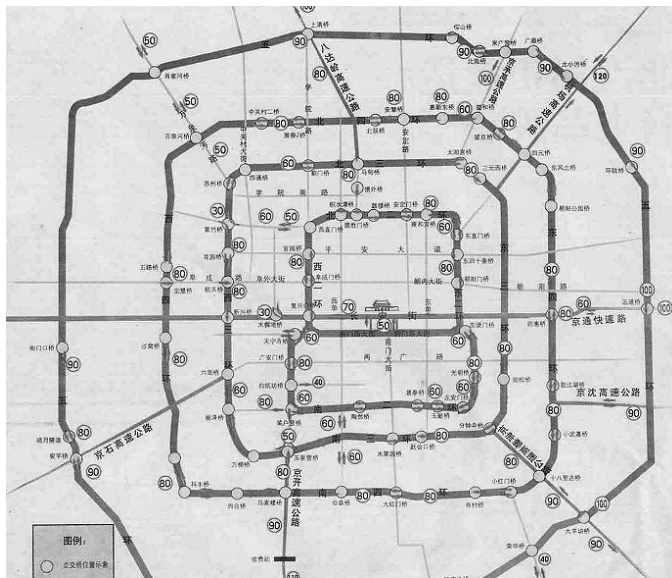
会場で結婚相手を募集している男女の年齢は28歳～38歳までの場合が多く、募集件数の数などからして、北京における“80後”の“剩男・剩女”と独身者の結婚難問題がいかに深刻かが窺える。また、代理見合いの親たちは、自分の子どもの条件について、年齢だけでなく、身長や年収、学歴、出身地などまで細かく公開しているのである。そして、募集相手についての要求は概して高く、例えば身長や出身地などのほかに、収入や財産に至るまで細かく基準を設けている場合が多い。それらの条件をすべてクリアしている人物が果たして代理見合いの場で相手を探す必要があるのかの疑問もあるが、我が子のために一生懸

命がんばっている親たちの気持ちは理解できるような気がした。筆者は北京の代理見合いの現場調査を通して、結婚相手に関する不可欠な条件は2つあるように思った。

「車と家は必須」

結婚相手を募集する親たちは、相手のマイカーとマイハウスの有無を重視する傾向が強い。もし相手が家を持っていないと言うと、次の話題に進まない場合が多い。とくに代理見合いの経験が豊富な親は、相手のプロフィールを瞬時的に見ただけで、話を続ける必要があるかどうか分かるという。確かに、いまの中国では結婚する際に男性が新婚夫婦のために家を用意することは当たり前とされている。そして、北京戸籍を保有する女性の親は、相手に対して家の保有を要求する場合がとくに多い。北京では家賃が極めて高く、マイホームを持っていないと結婚生活が大変だからである。しかし、不動産価格が高騰している中国では、多くの“80後”にとって、とくに北京のような大都市で家を購入することは極めて困難である。

表4：北京市の環状路と2017年の不動産平均価格（元/㎡）



北京平均 (元/㎡)	6万9000元 (約110万円)
二環路	14万3000元 (約229万円)
三環路	10万8000元 (約173万円)
四環路	8万5000元 (約136万円)
五環路	5万3000元 (約85万円)

出典：北京市住宅城郷建築委員会サイト <http://www.bjjs.gov.cn/>（2017年7月アクセス）

註：「链家不動産サイト（北京）」により発表するデータをもとに筆者が作成

2017年9月、中国住建部¹⁶が公表した「北京房屋価格統計月報（4月～6月）」によると、北京市商業住宅（不動産）の平均価格は1㎡当たり6万6,900元（約107万円）である。そして、中心部に近いほど不動産価格も高く、例えば筆者の親が住んでいる海淀区文慧園地区（西北二環路）の2017年における不動産価格は1㎡当たり14万3,000元（約228万8,000円）になっている。

北京市に住む親たちにとって、家を保有するだけではまだ足りない。親同士間の会話を聞くと、家のロケーションも大変重要である。仮に中心部から遠い場所に家を持った場合、毎日の通勤だけでも大変なことになるからである。同時に、家の所在地により、相手の所有資産（不動産）が換算できるのである。

筆者の観察によると、多くの外地出身者の親たちは、なるべく家のロケーションについての話題を避け、子どもの魅力について繰り返し強調していた。しかし、北京人の親は専ら家の保有とロケーションに話を

¹⁶ 住建部：中華人民共和国住宅都市農村建設部の略称である。国家の行政機関で、建築・建設の行政管理を担当する。最高国家行政機関である国务院の構成部門のひとつ。日本の国土交通省に相当する。

集中させ、相手の会話の中からその情報を読み取ろうとする。

例えば、外地人の親：「そろそろ帰るよ」

北京人の親：「まだ暗くなっていないよ」

外地人の親：「地下鉄で日が暮れないうちに家まで帰りたいので」

以上の会話から、北京人の親はその時刻から暗くなるまでの所要時間を計算して、さまざまな交通手段とラッシュの要因を考慮に入れ、相手の家の所在地を正確に判断していたのである。

このように、相手の経済力を過度に重視する北京市の親たちの姿が印象に残る、代理見合いの現場であった。

「北京市戸籍も必須」

中国では“門当戸対”（両家の格が釣り合うこと）という言葉がある。具体的に、結婚する双方の家庭の経済力、学歴、家族全員の社会的地位、戸籍の種類などが釣り合うことが求められている。「代理見合いコーナー」における筆者の調査によると、“70後”の後半と“80後”の親を中心に中流階級に属する者が多く、子どもの学歴を見ると大卒の学士保有者が多い。また、北京大学のような著名大学を卒業した者もいる。それから、留学して帰国した修士や博士の学歴を有する者も珍しくない。戸籍に関していえば、北京生まれの「北京人」もいるし、北京戸籍を後から取得した外地出身者もたくさんいる。とくに後者の場合は長期にわたり、さまざまな努力を通して北京戸籍を持つようになっている場合が多く、マイホームを購入している場合は家が金持ちのはずである。

一方、北京各地の「代理見合いコーナー」では「北京戸籍、未婚、家持ち、学士以上の学歴」の条件が基本となっている。そのうえ、著名大学を卒業、両親は北京で在職中あるいは退職済（年金は外地より高い）、さらに共産党員の身分まで要求される人こともある。ところが、子どもの写真を要求する人はほとんどいなく、性格や趣味についての質問が全くなかったのは意外であった。

北京人の親として劉氏が言っているように、チラシには修正を入れた写真、または「イケメン」、「美人」、「優しい」などの言葉を連ねているが、それはまったく無意味なものである。（図4を参照）

図4：事例にみる募集者のプロフィール





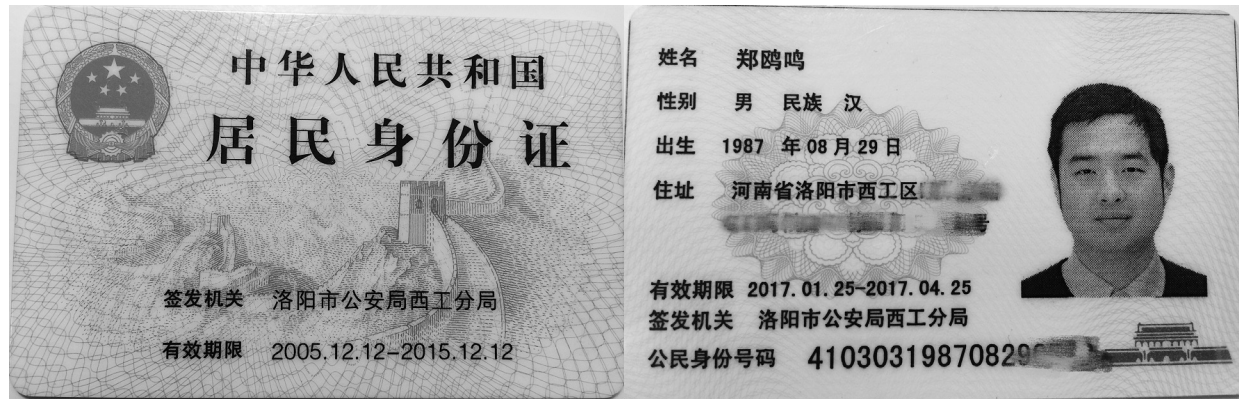
註：以上の写真は、筆者撮影

図4の上の写真（左側）が示すように、婿募集者の親は娘の魅力を紹介したチラシの中で、山西省戸籍の部分は小さな文字で記入し、求める相手に対しては大きな文字で「北京の戸籍と家」と強調して書いている。一方、その右側のチラシは、“北京女娃”（北京出身・北京戸籍）をタイトルとして強調し、“有車・有房”（車と家を所有）という実力を記入しているのみで、相手（男性）に対する要求は全く書いていない。つまり、男性応募者については面談で決めるということであり、よほどの実力者でない限り、近寄るなという意味合いが込められている。

「見合いコーナー」で見られる「戸籍偏重」の傾向は、現在中国における地域差別の社会現象の一面を如実に反映している。筆者は中国各地から集まってきた親たちに対し、中国各地に対するイメージを聞いてみた。例えば上海人の場合、上海以外はすべて農村地域だと思っている親が多い。一方、上海以外の地域から来た親たちは、上海人は「傲慢無礼」だと言う。東北地方の人びとに対しては「凶暴・粗野」というイメージが多く、河南省出身の人に対して「貧乏・詐欺師」いうイメージが多かった。なお、新疆自治区の出身者については「極端的な宗教信仰者」、「テロリスト」、「ヤバイ」というイメージが多い。とくにウイグル族出身者は北京や上海などの大都市でホテルにチェックインする時、地方政府に監視され、警察署にまで通報されることが多いという。以上のような地域差別の現象は、現在の中国全土（香港、台湾地域を含む）において多く存在する問題である。

北京市の「代理見合いコーナー」で見られた「戸籍偏重」の現象をさらに細かく分析すると、「京籍」と「京戸」にも差があることが分かる。北京人の親たちから見れば、「京籍」と「京戸」には根本的な違いがある。つまり、北京で生まれた人は「京籍」と見られ、「京戸」とは外地の出身者として自分の努力で北京戸籍を取得した者であり、「京籍」に比べて生活習慣や婚姻文化、言語アクセントなどの差があり、戸籍を取得しても本場の「北京人」と言えないのである。

図5：筆者の中国居民身份证



註：1、以上の写真は、筆者撮影

2、左側は、今は無効となった昔の身分証の裏側で、右側は3ヶ月間のみ有効の「臨時身分証」の表側である

表5：中国居民身份证の地域コード

華北地区	北京市	110000	華東地区	上海市	310000	華中区	河南省	410000
	天津市	120000		江蘇省	320000		湖北省	420000
	河北省	130000		浙江省	330000		湖南省	430000
	山西省	140000		安徽省	340000	華南区	広東省	440000
	内蒙古自治区	150000		福建省	350000		広西自治区	450000
東北地区	遼寧省	210000	江西省	360000	海南省	460000		
	吉林省	220000	山東省	370000	西北地区	陝西省	610000	
	黒竜江省	230000	四川省	510000		甘肅省	620000	
特別地区	台湾地区	(886)710000	貴州省	520000		青海省	630000	
	香港特別	(852)810000	雲南省	530000		寧夏自治区	640000	
	澳門特別	(853)820000	チベット	540000		新疆自治区	650000	
			重慶市	500000				

出典：中華人民共和国公安部サイト <http://app.mps.gov.cn:8090/client/scene.jsp?id=151> (2017年7月 アクセス)

図5のように、筆者の身分証明書の番号における最初の6桁(410303)は戸籍出身地を表している。つまり、41(河南省)03(洛陽市)03(西工区)という意味である。次の8桁(19870829)は生年月日を表し、最後の4桁が個人に属する唯一の番号となる。仮に筆者が将来、北京市の戸籍を取得しても、身分証の最初の6桁番号が変わらないのである。

「見合いコーナー」で活躍する北京人の親たちは、警察官のような識別能力を身に付け、外地出身者の身分証を見た瞬間、上のような詳しい情報が分かるのである。表5は、中国31の省、自治区、直轄市と香港、澳門、台湾地区すべての地域を番号で表したものである。

②若者と親世代の論争

2016年5月、中国中央テレビと上海復旦大学により、北京と上海に暮らす1万人の“80後”単身者を対象に、「親の代理見合い」に関するサンプリング調査が実施された。その結果によると、「代理見合い」活動に反対する人は約35%であった。その主な理由は、「若者たち個人の問題であり、本人の代わりに親が見合いをするのは可笑しい」であった。一方、約49%の人が賛成と答え、「代理見合いの結果には納得できないけれど、親たちの焦る気持ちは理解できる」と言った。

筆者は北京市中山公園の「代理見合いコーナー」に数回足を運んだが、若者たちの姿はほとんど見られ

なかった。親たちは、「子どもたちは普段仕事が忙しいし、同僚以外の人と会うチャンスがほとんどないため、子どもの同意を得て、本人の代わりに見合いをしているのだ」という。一方、子どもの同意が得られなくても、「代理見合いコーナー」に来る親は多い。

山西省出身の張さん（64歳）は、週末はほぼ中山公園に来て、「一人っ子」の娘のために婿探しをしている。娘は親の行為が恥ずかしいと言って、何度も口喧嘩をしたことがある。張さんの娘は、「本当の好きな人と結婚がしたい。たとえ独身でも幸せになれるし、自信を持って人生を生きられる」という。張さんは、「お前が結婚しないと、俺たちが安心して死ねない」と叱る。張さんのような考えをもつ親は多い。また中国では、結婚しないと親不孝であると見なされがちである。一方、親と子の結婚観念の違いにより、代理婚活のほとんどはうまくいかないのが現状である。

筆者の調査を受けた北京市出身者の劉さん（女性、36歳）は、親の代理見合いをめぐる激しいケンカになったことがあるという。167センチの身長で、体重が約90kgの劉氏はいつも「デブ」と呼ばれている。劉さんの親は娘の結婚難を心配し、5年前の2012年から各公園で代理見合いをしてきた。劉さんは親の行為に反対し、自殺で親を脅かしたことまである。「フリーランスだし、結婚してくれる人がいなくても自由に生活ができる」と彼女は言う。しかし、2015年12月に劉さんの父は、彼女との口論のなかで脳卒中になってしまった。父親は入院し、「お前が結婚して幸せになるその日まで生きられないかもしれない」と言った瞬間、劉さんは涙が止まらなかったという。

“80後”の一部は、さまざまな原因で独身生活している。彼らはいろいろと失敗を経験しているうちに、結婚逃避の気持ちになっており、婚姻に対して恐怖さえ感じるようになったのである。また、自分の価値観と独立性を堅持しながら、親の期待を裏切ることとの矛盾に悩んでいる人も多い。

5. 金銭目当ての婚姻と“裸婚”

“80後”の結婚に対する見方のひとつに、お金があったら幸せの婚姻が実現するが、そうでない場合は幸せな結婚なんて考えられないというものがある。経済能力は幸せな婚姻を実現する唯一の条件ではないはずだが、“80後”男性において、車やマイホームは結婚に必要不可欠な条件になっている。彼らは中国経済が急速に発展した過去30年の間に生まれ育ち、都市部では大部分が「一人っ子」である。親の手厚い保護を受け、将来も幸せになれるように大事に育てられてきた。とくに女性の場合、将来は裕福な家庭に入り、幸せな結婚生活が送れるように親から期待されている。一方、現実的な立場からすれば、“80後”の大部分は大学を卒業してあまり年数が経っておらず、まだ高収入が見込めない年齢層にある。そして、社会上昇を目指してこれから奮闘努力をしていかねばならず、親の力を借りずに豊かな暮らしをしている者はあくまでも少数派である。結婚適齢期にある筆者を含む“80後”は、結婚するためのお金を貯めることが至上命題となっており、そのことを考えるだけでぞっとする。

“80後”の婚姻と金銭に対するさまざまな価値観については、前でも説明したように、現在の中国において見合い番組が流行しており、“80後”の婚姻問題や今日のさまざまな社会問題を垣間見る窓口になっている。「非誠勿擾」という見合い番組に出場した22歳の女性馬さんは「私と一緒にサイクリングに行ってくださいか」という男性からの問いに対し、「BMWの中に座って泣いていた方がまだましだわ」と答えた。もちろん、馬さんはいわゆる拝金主義者で、男性のプライドを大きく傷つけてしまった。一方、その男性は収入が少なく、純愛を信じていただけにショックも大きかっただろう。このような激しく矛盾している価値観が現には同時に存在し、片や「拝金主義婚」、片や“裸婚”という極端的な婚姻形態が出現したのである。

1) 「拝金主義婚」

これまで、中国の女性は「高身長、高収入、高学歴」という「三高」を求めてきたが、現在の拝金主義的な“80後”女性にとって、最も理想的な結婚相手は“有房、有車、有銭、有権”（家もち、車もち、金もち、権力もち）である。彼女たちにとって、結婚生活においてもっとも重要なのはお金であり、その証拠のひとつに、2011年に中国婚姻家庭研究会が行った調査によると、“80後”女性の約7割が「愛人や誰かの浮気相手になることにとくに抵抗はない」と答えた。このように、都市部に暮らす“80後”女性の中で、拝金主義的な価値観と婚姻観を持つ者は多い。たま調査によれば、北京や上海などで高級マンションや車を所有している男性なら、年齢を問わず、たとえば60歳以上でも、“80後”の若い女性に人気があり、結婚志願者が後を絶たないという。「自分で仕事をしながら20年間努力するより、金持ちの愛人になった方が良い暮らしができる」と考えている若い女性がたくさんいるとのことである。このように、経済力ばかりを求める女性が増えていることで、結婚できない男性が急増しているのが現状である。

拝金主義的な価値観が生まれた背景には急速な経済成長があり、人びとの経済生活における格差の広がりや、金銭至上主義的な風潮がある。また、男性主導型の社会において、女性が事業で成功するには限度があり、男性に頼り、万能型の男性と結婚したほうが幸せな人生が実現できると信じている人は多い。一方、事業に成功した男性は金銭次第でそうした若い女性の希望に応えることができ、そのような事例が増えるにつれ、若者たちの間で拝金主義的な価値観が広がるようになったと思われる。

2016年の「北京市国民経済と社会発展公報」によると、北京市の事例では、男性は“官二代”（官僚ジュニア）や“富二代”（金持ちジュニア）を除き、年収は平均9万6,000元～14万4,000元¹⁷（約154万円～230万円）で、拝金主義的な女性たちの基準に達している男性はあくまでも少数である。それに加え、近年の不動産価格や物価の高騰により、一般の“80後”サラリーマン男性にとって、自力でマイホームを買うことは大変難しくなっている。

2) “裸婚”

「拝金主義婚」とは逆に、“裸婚”（ラコン）という新たな婚姻形式が近年話題になっている。“裸婚”とは「家なし、車なし、披露宴なし、結婚指輪なし、あるのは結婚証明書だけ」という状態での結婚のことである。“裸婚”を選ぶ人びとは“裸婚族”と呼ばれ、金銭や持ち家よりも純愛を信じ、恋愛感情だけを最優先して結婚に踏み切る。その年齢層はおよそ20歳～35歳で、ほとんどの“裸婚族”は“80後”と“90後”の男女である。

“80後”はまだ社会に進出したばかりで、自分だけの力ではきちんとした披露宴さえ挙げられない人がほとんどである。結婚適齢期に達した一部の人は、結婚難を解決するために敢えて“裸婚”を選ぶ。日本人作家の加藤嘉一氏によると、中国の若者にとって“裸婚”は本意で、やむを得ずとる現実主義的な態度かもしれない。激しい就職競争、上がり続ける物価、一生働いても買えない住宅、親の世話と育児など、男性であれ女性であれ、かれらが受ける物質的、精神的なプレッシャーは大変大きい [加藤嘉一2012]。

一方、“裸婚”で同居はしたものの、将来的にはさまざまな問題を残すことが多い。北京や上海などの大都市では、結婚のコストが極めて高く、家賃を払うだけでも大変である。収入が順調に伸びていけばいいのだが、場合によってはいつまで経っても家が買えず、新婦の家族からくる圧力にも耐えなければならなくなる。

しかし現状では、“裸婚”を受け入れざるを得ない若者がますます増えている。“裸婚”は一種の流行であるだけでなく、“80後”の婚姻観と価値観の変化のひとつとしてとらえられる。もちろん、“裸婚”現象

¹⁷ 「2016年度北京市国民経済と社会発展公報」に基づき、25歳～35歳の収入データと2016年度における北京市の最低収入、および北京市の1人当たりの年間平均収入データを元に筆者が算出した。

に対して心配の声も上がっており、たとえば中国人作家の韓寒氏によると、婚姻の基礎には感情・物質・家族（両家の支持）の3つがあり、そのどちらが欠けても問題である。“裸婚”には物質を意味する経済力が欠落しており、やはり大きな問題と言わざるを得ない、と指摘している [韓寒2011]。

結婚費用について考察するにあたり、まず披露宴のコストを見てみよう。筆者は2015年にある友人の結婚式と披露宴に参加した。図6はその時の様子を写した写真である。

図6：中国人の結婚式とその様子





註：以上の写真は、筆者撮影

図6の写真が示すように、中国では披露宴をビッグパーティのように挙げる場合が多い。筆者の友人は“80後”の男性として、両親は大企業を運営する金持ちである。友人の許可をもらい、披露宴の費用にかかわる情報を本研究で公開する。

まず、披露宴会場の規模は来賓の人数を見ながら決める。会場は“面子”（メンツ）にかかわるといことで、たとえ無理をしてもなるべく豪華な場所を借りるのが普通である。次に、現在の風習として、披露宴当日に新婦（親族を含む）を迎えるために数多くの豪華な車を用意しなければならない。図6の写真のように、友人の親は人脈と資源を使い、アメリカ産の米国大統領用の車と同じスタイルのキャデラックを16台準備した。メンツというものが、中国人の日常生活に極めて大きな役割を果たしていることが分かる。とくに、披露宴という儀式そのものは自分と結婚する双方の家庭だけのための典礼ではなく、友人と知人に「個人と家族の幸せと実力」を誇示するためのものである。

それから、宴会料理についてもなるべく贅沢にすることが要求される。友人の場合、披露宴の出席人数は720人を超え、会場で用意したテーブルは72卓があった席写が表すように、金色の食器に載せられたものはいずれも貴重な食材で作られた料理である。友人からもらった資料によると、料理の内容には「ベトナム産ふかひれ」、「ロシア産伊勢海老」、「南アフリカ産アワビ」、「カナダ北極産赤ナマコ」、「フランス産トリュフ」、「ハンガリー産フォアグラ」などの希少の食材が集められた。披露宴コストについて、細かいところまでの調査は困難であったが、筆者は大まかな情報を入手し、次のようにまとめることができた（表6を参照）。

表6：筆者が参加した友人の結婚式に関わるコスト（一部）

項目	数量	単価（元）	総額（元）	備考
車両（貸切）	16	3万5,000	56万	貸切代、運送料
会場	1	1万7,500	1万7,500	
披露宴（結婚式） 企画機構	1	5万1,700	5万1,700	デザイン、ビデオ製造、スピーカ、 ライト、電気などの関連設備
人件費	若干	不明	23万3,000	披露宴司会者、芸能人、歌手、 現場スタッフなど
会席料理	76卓	8,800	66万8,800	予備席4卓を含む
総計			153万1,000	

註：温州市天禧縁婚慶企画会社と友人からもらう資料をもとに筆者が作成

表6のデータが示すように、友人の披露宴にかかった費用はおよそ153万1,000元（約2,450万円）であり、一部の雑費については計算が難しいために省略した。このような高額な費用は、平均的な“80後”にとっては負担できない額であり、金持ちの親がいるからこそ実現した披露宴である。また、メンツを重要視する中国社会では、たとえ若者が自由と気楽な結婚式を望み、「旅行結婚」や西洋のような「ビュッフェ式の披露宴」をしたくても、なかなか親に賛同してもらえないのが通常である。

おわりに

本研究では、“80後”の婚姻をめぐるディンクス現象、“剩男・剩女”向けの見合い系番組、独身者とセックスフレンド、レンタルフレンド、代理見合い、金銭目当ての婚姻、および“裸婚”などの社会現象について取り上げた。平均年齢が30歳以上の都市部“80後”独身者たちは、結婚難の問題を中心に社会から注目を集めている人口集団である。中国最大の出会い系サイトの責任者によると、35歳前後の“80後”独身者の男女性比が大幅に崩れてしまい、100人の女性に対する男性数が300人にも上っていることが分かった。とくに都市部に働く独身者たちは、さまざまな理由により独身生活を続けている。2011年に調査を行った746人のうち、約4分の3の回答者がセフレを持っていると答えた。そして、セフレを持つ“80後”独身者の共通点として、高収入で高学歴の者が多かった。しかし、2回目の調査結果を見ると、北京で働く“80後”の人口構成が変わっており、また彼らのセフレに対する考えも変化し、家庭と婚姻に対する考え方に変化が現れたことを確認した。また、若者による「見合い大会」と親たちによる「代理見合い」現象について考察した。現在の都市部“80後”独身者のなかには、相手の金銭的条件を過度に重要視するあまりに、なかなか結婚できない人が多い。

本研究では、中国都市部における“80後”の婚姻現状と諸現象についての調査と研究により、現代中国における社会問題の一側面を明らかにした。そのほか、かれらは中国の伝統文化をも部分的に引きずっており、多種多様な価値観を形成している特別な世代ともいえる。“80後”世代は1979年に実施された「計画生育政策」の影響と高度な経済発展の下に成長し、都市部では晩婚・晩産化、さらには子どもを産まないディンクス族までが出現した。とくに“80後”若い世代の家族と婚姻に対する価値観は多様化しており、晩婚・晩産および子どもを作らない生活を選ぶ者も多い。また、中国各地のテレビ番組では見合い関係のものが大流行しており、そこから“80後”の多様な価値観と婚姻観を垣間見ることができる。とくに都市部において、“剩男・剩女”と呼ばれている独身者たちにとって、見合い系の番組は結婚相手を探す有効な手段のひとつになっている。そして高い視聴率により、かれらの価値観や振る舞いは全国すべての年齢層の人たちにさまざまな影響を及ぼしており、“80後”の婚姻観への注目という一大社会現象を引き起こしている。一方、さまざまな理由により結婚をまだ考えたくないという“80後”も増加しており、筆者は中国の大都会で働いている“80後”ホワイトカラーに対し、セックスパートナーについての調査を行った。

2017年は、“80後”の最年長者が37歳になる年である。“80後”世代は全体がまもなく中国社会の主力になろうとしている。今後の20年～30年の間に、かれらは中国においてだけでなく、世界範囲でもさまざまな影響を与えていくことになるかと予想され、同世代についての研究はグローバルな意義があると言っても過言ではない。

<参考文献>

【日本語文献】

鄭鳴鳴

2013年「中国80世代の婚姻問題」『国際文化論集』第8号 西南学院大学

平野健一郎

1994「人の国際移動と新世界秩序」『国際問題』第412号

【中国語文献】

韓寒

2011年『脱節の国度』中国数字時代出版社

加藤 嘉一

2012年『致困惑中的年轻人』鳳凰出版社

李銀河

1991『中国人的性愛於婚姻』性社会学系列 河南人民出版社

王敏

2011「中国高離婚率背後の婚姻困境」『社会觀察』第三期

【中国語資料】

中国国家统计局

2017年《2016年国民经济和社会发展统计公报》

中国社会科学院

2012年《2011年中国城市白领性生活调查报告》

2016年《中国城市发展报告》中国经济周刊出版社

中华人民共和国住房和城乡建设部

2017《北京商品房价格统计月报（4月～6月）》

【参考 URL】

北京市住宅城鄉建築委員會 <http://www.bjjs.gov.cn/>

百合網 <http://www.baihe.com>

江蘇衛星テレビ「非誠勿擾」 <http://fcwr.jstv.com>

「KISS 福岡」九州国際観光広場 <http://kiss-fukuoka.jp/japanese.html#>

「人民網」国内見合い系番組の現状分析 <http://media.people.com.cn>

「人民網」西方学者は中国の見合い系の番組低俗化に対する批判 <http://culture.people.com.cn>

世紀佳緣 <http://www.jiayuan.com>

「搜狐網」ネットユーザー世論調査 <http://www.sohu.com>

中華人民共和国公安部 <http://www.mps.gov.cn/>